

2019年度

学生による授業評価
よりよい授業を目指して

報 告 書

2021年1月

和洋女子大学

目次

1. はじめに	1
2. 授業評価実施概要	2
3. 総括	3
(1) 全学授業評価結果の概要	3
(2) 共通総合科目の課題	9
(3) 専門科目の課題	11
4. 資料	13

1. はじめに

和洋女子大学では、大学の理念、教育目標が「ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）」、「カリキュラム・ポリシー（教育課程方針）」、「アドミッション・ポリシー（入学者受け入れ方針）」の3つのポリシーと連動する内部質保証の体制を構築し、3つのポリシーに基づき、適切に教育が行われていることを学内で検証することによって教育の質の維持・向上に取り組んでいる。また、アセスメント・ポリシーを定め、3つの方針に応じた教育の管理が行われているかを検証している。

本授業評価アンケートはアセスメント・ポリシーに従った、教育臨床現場での評価の仕組のひとつである。学生から授業に対する評価を受け、学部・学科の教育方針に応じた教育が遂行されているかを検証する材料として活用している。

併せて、教員の教育に対する自己点検の機会としても授業評価アンケートを活用している。授業は教室内で教員と学生との相互交流において進行するため第三者からの評価が困難であり、教員が自身の教育を点検する手段として、学生の声を客観的に把握できる指標となっている。そうした授業の自己点検の結果を総括したものであり、学部・学科の教育課程方針、学授与方針と現場教育との適切性を確認に資するものである。

なお、この報告書は教育内容の可視化を進める意味で広く公開することもその役割である。報告書をご覧いただき、本学の教育について、ご理解をいただければ幸いである。

和洋女子大学 学長
岸田宏司

2. 授業評価実施概要

授業評価は、前期開設科目については2019年7月8日（月）～8月3日（土）、後期開設科目及び通年開設科目については2020年1月6日（月）～2月6日（木）の期間中に実施した。2019年度の開設授業科目は、前期748科目、後期723科目、通年117科目、前期集中40科目、後期集中20科目、通年集中86科目で、合計1,734科目である。このうち授業評価対象科目は、佐倉セミナー科目、学外実習科目、集中科目、大学院科目、同時開講科目、読替科目、受講者数10人以下の科目を除いた合計1,063科目で、全開講科目の61.3%に相当する。ただし、この対象科目のうち前期27科目、後期18科目が未実施となったため、全開講科目のうち授業評価を実施した割合は58.7%である。また、今年度から、オムニバス科目を対象科目に追加し科目の代表教員に実施させた。

評価は、今年度からmanaba courseを用いたWEB回答方式のアンケートを実施し、各授業科目について評価と自由記述を学生に入力させた。アンケートの設問は付録「授業アンケート」のとおりである。主に教授方法・スキルに関する評価、授業準則・秩序に関する評価、知的刺戟や理解度関連達成度に関する評価、主体的学修に関する評価、教員の熱意に関する評価、総合的満足度、学生自身の授業への参加度に関する自己評価などの項目から構成されている。なお、アンケートは5段階評価として設計されている。5は「強く思う」（Q15は「3h以上」、Q19は「大変満足」）、4は「そう思う」（Q15は「2～3h未満」、Q19は「やや満足」）、3は「どちらでもない」（Q15は「1～2h未満」）、2は「そう思わない」（Q15は「1h未満」、Q19は「やや不満」）、1は「全くそう思わない」（Q15は「特にしていない」、Q19は「不満」）、0は「該当しない・答えたくない」を意味している。

調査は、実施期間中の各授業の終了時のほぼ15分程度を利用し、原則として授業科目担当教員がアンケートの指示を出し、教員が教室を退室した後、スマートフォン等で回答入力を学生自身が行なった。アンケートデータは、業者に委託して集計し、授業科目ごとの結果は科目担当教員に通知される。各教員は、授業評価の結果を各自で検討し、その感想・今後の授業改善への抱負などについて、全担当科目を総括してA4版1枚以内に所感を作成した。この文書はネットワークにて教職員が閲覧することができ、学内、相互の授業改善の工夫等を共有している。

3. 総括

(1) 全学授業評価結果の概要

以下に評価結果の全体概要を示すこととする。個々の授業についての評価結果を全体としてまとめたものが[表1]である。

1) 前回調査結果との比較

2019年度(平成31年度)の授業評価アンケートの実施にあたっては、2017年度(平成29年度)からの調査実施要領に基づき実施した。ただし調査対象科目は前回の受講者数20人以上から受講者数11人以上の科目を対象とした。

調査結果では対象科目の履修者数は52,235名、回収数44,221名、回収率85%を示し、前回調査(2018年度)の回収率86%に比し僅かに低かった。質問項目Q.1~Q.19全項目のうち、Q.15を除いて前年比で上昇している。「Q19. 授業の総合的満足度」が前回の平均評価(4.10)から(4.24)へと(0.14)ポイント上昇したのに加えて、質問項目「Q13. 積極的に意見や質問をした」は、2016年度の(3.19)、2018年度(3.34)から2019年度(3.58)へと僅かであるが上昇した。「Q14. よく出席した」が2018年度の(4.41)から2019年度は(4.52)と僅かながら上昇した。反面、質問項目「Q15. 予習・復習の時間」については、19項目中低いポイントであったものがさらに2018年度(2.40)から2019年度(1.99)へと下降している。

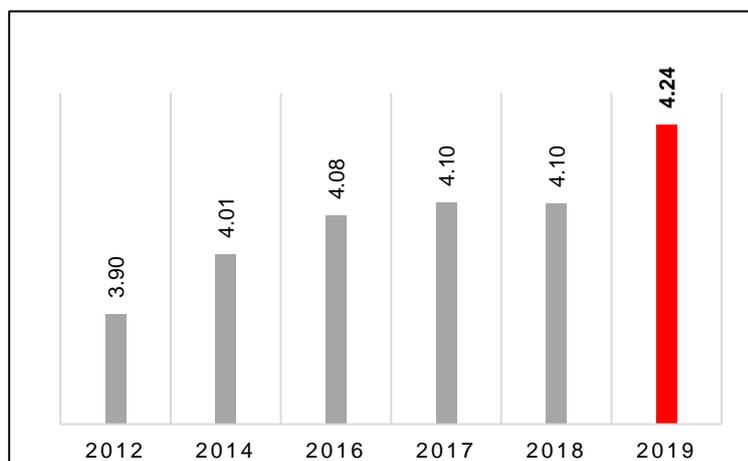
2) 教員の授業運営

① 授業の方法・スキル

学生が教員の授業運営と学習指導、とりわけ授業の方法やスキルについてどのように評価しているかに関わる質問項目は、Q4からQ8であり、それぞれの評価平均値を見てみると、「Q4. 教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた」(4.08)、「Q5. 教材が理解に役立った」(4.26)、「Q6. 教員の板書や図の見やすさ」(4.08)、「Q7. 教員の声が聞き取りやすかった」(4.29)、「Q8. 説明がわかりやすかった」(4.11)であり、全体的には評価されているように考えられる。

いずれも前回に比べて評価がやや高まっている。「Q4. 理解度に合わせて授業を進めた」および「Q6. 教員の板書や図の見やすさ」の評価値が相対的に低かったが、それぞれQ4. 2018年度(4.07)、2019年度(4.08)、Q6. 2018年度4.06、2019年度(4.08)と僅かに上昇した。教員が授業スキルの向上に努めていることが窺える。

【図1】総合満足度の年度推移



キャンパス		曜日		履修者数	52235名
学部		時限		回収数	44221名
教員		教室		回収率	85%
科目	全体				

項目別回答分布(人数と平均値)

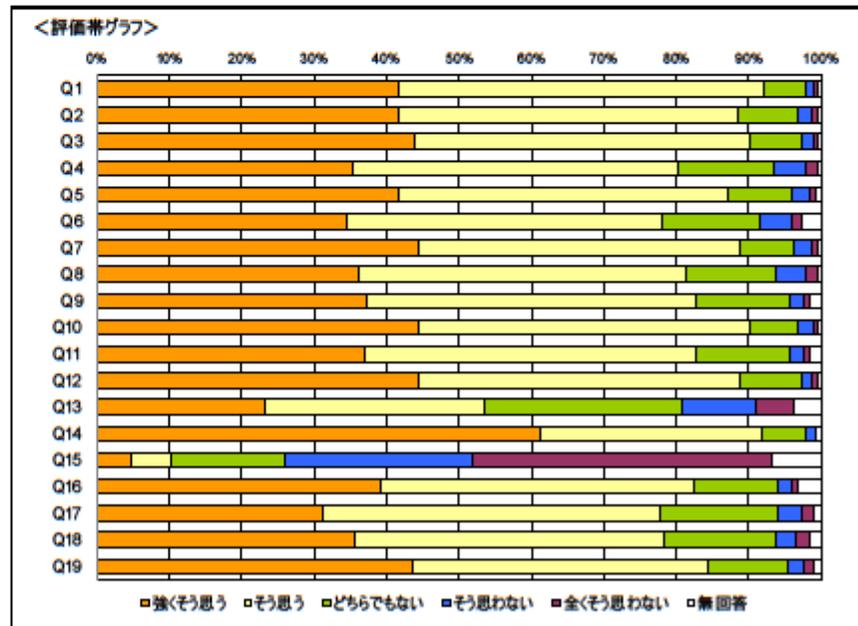
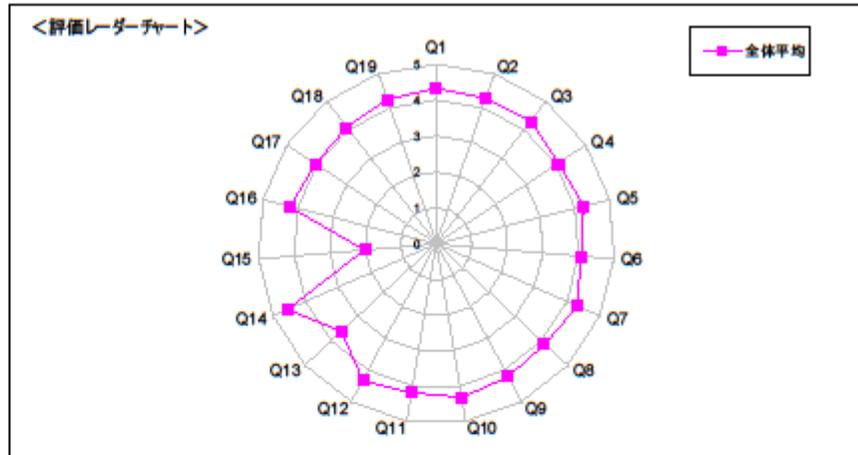
	5	4	3	2	1	無回答	全体平均
Q1.シラバスに沿っていた	18475	22211	2612	502	183	238	4.33
Q2.内容は知的刺激に富んでいた	18456	20724	3645	841	358	197	4.27
Q3.新しい知識・技術を学べた	19389	20513	3190	624	311	194	4.32
Q4.理解度に合わせて授業を進めた	15626	19878	5777	1947	752	241	4.08
Q5.教材が理解に役立った	18441	20100	3941	1001	420	318	4.26
Q6.教員の板書や図の見やすさ	15266	19309	5924	1899	675	1148	4.08
Q7.教員の声が聞き取りやすかった	19644	19602	3292	1082	402	199	4.29
Q8.説明がわかりやすかった	15964	20036	5407	1838	749	227	4.11
Q9.質問への対応が適切だった	16551	20095	5662	817	402	694	4.18
Q10.開始・終了時間が適切だった	19621	20260	2952	889	305	194	4.32
Q11.私語に対し適切な対応だった	16411	20203	5631	957	355	664	4.18
Q12.教員の熱意を感じた	19659	19581	3862	594	288	237	4.31
Q13.積極的に意見や質問をした	10261	13411	12060	4494	2288	1707	3.58
Q14.よく出席した	27061	13580	2684	519	106	271	4.52
Q15.予習・復習の時間	2093	2453	6937	11419	18338	2981	1.99
Q16.試験に積極的に取り組んだ	17352	19105	5171	750	370	1473	4.22
Q17.さらに勉強したくなった	13803	20563	7173	1517	708	457	4.03
Q18.受講を後輩に勧めたい	15784	18873	6784	1226	853	701	4.09
Q19.授業の総合的満足度	19307	18042	4854	978	617	423	4.24

【Q14】で授業への出席率の高い群(5・4)の回答分布

	5	4	3	2	1	無回答	平均
Q2.内容は知的刺激に富んでいた	17642	19103	2871	711	257	57	4.31
Q4.理解度に合わせて授業を進めた	14930	18428	4841	1727	629	86	4.12
Q5.教材が理解に役立った	17527	18557	3196	870	330	161	4.29
Q6.教員の板書や図の見やすさ	14559	17925	4979	1689	562	927	4.11
Q7.教員の声が聞き取りやすかった	18658	18058	2618	941	309	57	4.33
Q8.説明がわかりやすかった	15253	18583	4477	1619	632	77	4.14
Q11.私語に対し適切な対応だった	15687	18707	4675	839	273	460	4.21

【Q14】で授業への出席率の低い群(3・2・1)の回答分布

	5	4	3	2	1	無回答	平均
Q2.内容は知的刺激に富んでいた	765	1561	752	129	93	9	3.84
Q4.理解度に合わせて授業を進めた	651	1406	917	207	113	15	3.69
Q5.教材が理解に役立った	863	1495	728	123	83	17	3.89
Q6.教員の板書や図の見やすさ	664	1341	917	203	108	76	3.70
Q7.教員の声が聞き取りやすかった	932	1497	659	133	83	5	3.93
Q8.説明がわかりやすかった	665	1409	906	209	109	11	3.70
Q11.私語に対し適切な対応だった	677	1444	941	113	77	57	3.78



【表1】全体評価

②授業の進め方

教員の授業の進め方や授業中の教室の秩序維持について学生がどのように評価しているかは、3つの質問項目の評価平均値、すなわち「Q1. シラバスに沿っていた」(4.33)、「Q10. 開始と終了時間が適切だった」(4.32)、「Q11. 私語に対し適切な対応だった」(4.18)からすると、おおむね評価されていると推測できる。なかでも、前回の調査結果についても指摘された、私語に対する適切な対応に関しては、2017年度(4.14)、2018年度(4.16)から2019年度は(4.18)へと評価値が年々上昇しており、教員の側における対応の変化が窺える。

③知的刺激

質問項目「Q3. 新しい知識・技術を学べた」の平均評価値は、2017年度の(4.24)から2018年度(4.25)、2019年度(4.32)へと僅差ではあるが上昇している。「Q2. 内容は知的刺激に富んでいた」の評価値(4.27)や、Q18. 受講を後輩に勧めたい(4.09)は前年度比では上昇しているが、「Q17. さらに勉強したくなった」の評価値は前回よりやや高くはなったものの(4.03)にとどまった。そのことから、授業中に受けた知的刺激が学習意欲を十分に引き出すまでには至っていないように思われる。

④主体的な学びの促進

大学での学びにおいては学生が自ら学び、考える姿勢を修得することが求められる。しかし、大学のユニバーサル化が進むにつれて、目的意識が希薄で主体的に学ぼうとする学生が少なくなったと指摘されることが多くなった。今回のアンケート調査では受講者の主体的な学びを引き出す質問項目と考えられるのは、「Q2. 知的刺激に富んでいた」(4.27)、「Q9. 教員は学生の質問、相談に適切に対応した」(4.18)、「Q13. 積極的に意見や質問をした」(3.58)であり前年度比において上昇していた。おおむね主体性の喚起はできていると思われる。しかし、「Q15. 予習・復習の時間(の長さ)」は前年度2018年度評価値(2.40)から2019年度は(1.99)であり少なくなっていた。予習・復習の学習時間が少なくなったことがすなわち、学生の主体的な学びに直結しているかは判断できないが考慮する一因にはなると考える。

とりわけ、授業への出席率の高い学生の間で「Q2. 知的刺激に富んでいた」評価値(4.31)が高く、それが主体的な学びへと結びつきやすいと考えられるのに対して、出席率の低い学生の間ではその評価値(3.84)が低く、主体的な学びにつながっていないように思われる。本学では「きめ細かな指導」を教育の柱のひとつとして掲げ、出欠調査等を通じて欠席しがちな学生への指導を継続して行ってきたが、それに加えて、出席率の低い学生への授業内での指導をどのように行うかを検討する必要があるように思われる。

主体的な学びを導く学習環境のひとつの要素として、授業において教員の熱意が受講者に感じられるかどうかがある。担当する教員の熱の入った授業は、受講者にとって強い刺激を与えるものであり、教員にとっても自分の授業を受講する学生の間で「Q12. 教員の熱意が

感じられた」かどうかは、最も関心を払わなければならない質問項目であろう。この点で、「Q12. 教員の熱意を感じた」の評価値は 2017 年度 (4.23)、2018 年 (4.26)、2019 年度 (4.31) と上昇しており、総じて肯定的な評価が下されていると見なすことができる。

3) 学生の自己評価

前回の総括において、学生自身の自己評価から推測した修学像として、「出席はするが、積極的に質問したりすることはせず、また予習復習をあまりしない」学生像を確認したが、今回の調査結果もほぼ同様の学生の姿を描くことができる。「Q14. よく出席した」(4.52) は、質問項目の中で最も評価値が高いが、一方で「Q15. 予習・復習の時間」(1.99) は少なく、「Q13. 積極的に意見や質問をした」(3.58)、「Q16. レポートや試験に積極的に取り組んだ」(4.22) の評価値からはあまり積極的に勉学に取り組んだとは言い難い。教員にとっては学生が自ら学ぶための授業の工夫とそれに基づく授業運営の在り方について共同して検討を進める必要がある。

4) 受講者の状況別授業満足度

①受講者数との関係

受講者数と総合的満足度の関係を明らかにするため、1028 科目について受講人数区分毎に満足度の平均点を[表 2]に示した。この満足度評価については、学習効果を学生自身の「満足度」で測定することの意味について議論が必要なことに加え、今回の解析に関しても探索的なものであり、最終的な評価をするためには別途詳細な解析が必要ではあると考える。

30 人未満のクラスにおいて、満足度が平均値を上回り、30～50 人のクラスでは、全体の平均値に収束している。中でも、10 人以下のクラスにおける満足度が高い傾向があると判断することが出来る。一方、50～150 人までの満足度の平均値は、50 人以下のクラスに比しやや下降 (4.18) している。そして 150 人以上のクラスでも平均値(4.28)を保ち 30 人から 50 人のクラスと同じ満足度を示した。2017 年度の調査では、150 人以上の受講者数でも満足度は、30～150 人の区分と大きく変わらない、2018 年度は若干、低い傾向が見られた(3.98) という総括を行った。

【表 2】 受講者数と満足度

受講者数	11人～	20人～	30人～	50人～	100人～	150人～	合計平均
科目数	130	156	369	271	79	23	1028 ^{※1}
満足度	4.44	4.39	4.28	4.18	4.18	4.28	4.28 ^{※2}

※1…複数教員共同科目についてはクラス毎にカウント。

※2…満足度は小数点第 3 位以下を四捨五入としているため、それぞれの合計が必ずしも※2 とは一致しない。

特に、受講生が100人以上の科目はそれ以下の科目よりも対象となる科目数が少ないため、単純に比較するのには注意が必要である。もっとも、受講人数の多いクラスでは、学生の満足度いかに関わらず、きめの細かい指導ができにくくなることも事実であり、授業における指導の有効性といった観点から見れば、受講者数は少ない方が好ましいといえる。受講者数が50人を超えた場合、むしろクラスサイズそのものよりも、教員の講義内容や教授法によって満足度が左右される可能性も考慮する必要がある。

これまでの、歴年授業評価において、満足度に与える因子は、受講者数や次に述べる教員の年齢・職位、学生の出席率といった単純な指標では説明できない可能性が高く、授業評価結果については、個別の授業の特性を考慮したミクロな視点も欠かせないと思われる。

②教員の職位・年齢との関係

教員の職位・年齢と満足度との関係は [表3] のとおりである。単純に平均値だけを見ると、教員の年齢が高い程平均値が低く、(職位と年齢には相関があるので職位で区分することに意味はないが) 職位が高い程満足度が低いという昨年度と同様の結果となった。

【表3】職位・年齢と満足度

	教授	准教授	専任講師／助教	非常勤	全体
～ 39 歳		4.37	4.33	4.42	4.37
40 歳 ～	4.40	4.36	4.33	4.31	4.35
50 歳 ～	4.19	4.22	4.18	4.08	4.18
60 歳 ～	4.15	4.15	4.16	4.23	4.16
全 体	4.20	4.31	4.24	4.37	4.25 [※]

※表内各項目は小数点第3位以下を四捨五入しているため、それぞれの合計が必ずしも※とは一致しない。

同じような傾向を示した2018年度において、教員の年齢と授業の満足度の相関を試みた結果、統計的に負の相関を認めた(相関係数は-0.341で、危険率1%)。

本学における授業評価アンケートの結果からは、学生の満足度には、教員の年齢や職位だけではない、他の因子も関係していると思われる。少なくとも、「教員の年齢が高くなると授業の満足度が低下する」という短絡的な結論を出すことには慎重になるべきである。

③出席率との関係

全体のアンケート結果を、授業への出席率が高い群と低い群とに分けて集計し、この二群の集計結果を比較できるようにまとめたものが[表4]である。

【表4】出席率の高・低二群における各項目の平均値

	出席率が高い	出席率が低い	差
Q2. 内容は知的刺激に富んでいた	4.31	3.84	0.47
Q4. 理解度に合わせて授業を進めた	4.12	3.69	0.43
Q5. 教材が理解に役立った	4.29	3.89	0.4
Q6. 教員の板書や図の見やすさ	4.11	3.7	0.41
Q7. 教員の声が聞き取りやすかった	4.33	3.93	0.4
Q8. 説明がわかりやすかった	4.14	3.7	0.44
Q11. 私語に対し適切な対応だった	4.21	3.78	0.43

これをみると、ここで抽出されている質問項目のすべてにわたって、出席率の高い群の方の評価が、低い群の方の評価よりも0.4から0.47ポイント高くなっていることがわかる。出席率による差が大きい項目は、「Q2. 内容は知的刺激に富んでいた(Δ0.47)」、「Q8. 説明が分かりやすかった(Δ(0.44))」、「Q11. 私語に対し適切な対応だった(Δ0.43)」、「Q7. 教員の声が聞き取りやすかった(Δ(0.40))」、の順で差が大きかった。「知的刺激の強度」、「説明の分かりやすさ」が出席率に現れる学生の意欲に関連していること、また、「私語に適切に対応すること」を出席率の高い学生が授業に集中したい意欲的な学生が求めること、は容易に推察できる。一方で、前回の総括でも指摘されているが、教員の板書や声の聞き取りやすさは出席率とは関係なく優劣があるものと思われるが、それにもかかわらず二群の間でこのような差が出ているということは、満足度が一定レベル以上の授業の場合、授業内容や教授技術に関わりなく、出席率が高いほど評価を高く、また出席率が低いほど評価を低く付けるというバイアスが潜んでいる可能性はある。また、出席率を問う「Q14. よく出席した」の項目について学科ごとにみると(全体の平均は(4.52)、出席率の高かったのは、こども発達学科(4.67)、健康栄養学科(4.67)、服飾造形学科(4.54)、看護学科(4.54)、家政福祉学科(4.53)、が平均値を上回っており、次の4学科は、日本文学文化学科(4.31)、国際学科(4.48)、心理学科(4.47)は平均値より低かった。健康栄養学科を始め資格取得に直接結びついている授業が多い学科は「よく出席した」が高くなる傾向はあるため、学科同士を横

断的に比較することは簡単には出来ない。しかし、[表4]の「Q2.内容は知的刺激に富んでいた(0.47)」、「Q8.説明が分かりやすかった(0.44)」といった出席率の高い学生が出席の低い学生より高い評価を与える項目の評価を高めて行くことで、授業への出席率を上げて行く方向を各教員が模索することは意味のあることであると考えられる。

(2) 共通総合科目の課題

1) 共通科目(全学教育センター)の評価結果

①結果の概要

全学教育センターが所管する、「共通科目(外国語を除く)」「共通科目の外国語」「免許・資格科目(教職課程、博物館学芸員課程、司書・司書教諭課程)」について考察する。

②【共通科目】2019(H31)年度の共通科目は延べ10712件(名)の受講があり、内8663件(81%)の回答が得られている。総合満足度は、4.27で過去最高値を示し、全体平均値を+0.03ポイント上回った。2016年3.99(-0.09全体平均値との差)、2017年4.11(-0.02)、2018年4.11(+0.01)と、増加傾向があり、専門科目の満足度と遜色ない状況が昨年度から引き続き確認された。共通総合科目はクラスサイズが大きいクラス(100名以上クラス)が多く、このことが満足度低値の原因と指摘されてきたが、大人数クラスの授業運営でも各教員の努力により改善したことがうかがわれる。一方で、各項目の比較では、Q15(予習・復習の時間)は例年と同様、専門科目に比較して-0.37ポイントと大きく下回った。Q13(積極的に意見・質問)も-0.17ポイントと下回り、学生と教員の距離が遠いことがわかる。その他の項目はほぼ同等であり、Q5(教材が理解に役立つ)、Q8(説明がわかりやすい)は全体平均を上回った。教員は共通総合科目においても専門科目と同等に準備や運営をしていることが推測できる。

③【外国語科目】外国語科目は履修者が延べ3390件(名)、回答数が2988件(88%)の回答が得られている。総合満足度は、4.21と共通総合全体と同様に過去最高値を示したが、全体平均値よりは-0.03ポイントと下回った。2016年4.04(-0.04)、2017年3.88(-0.25)、2018年2018 4.04(-0.06)と、2017年に一旦大きく減少した後、徐々に増加傾向にある。特に、Q13(積極的に意見・質問)は+0.22ポイント、Q4(理解度に合わせた進行)は+0.11ポイント、Q15(予習・復習の時間)は+0.10ポイント全体平均を上回り、外国語科目、少人数制、教員と学生の近い関係などの良好な特徴が現れている。一方で、例年と同様にQ3(新しい知識・技術)は-0.20ポイント、Q2(内容の知的刺激)は-0.15ポイント、Q17(さらに勉強したい)は-0.14ポイントと全体平均を下回り、こちらも学生の中学高校からの継続した「英語」学習の意識の特徴が現れている。

④【免許・資格科目】今回、初めて全学教育センターがマネジメントする教職課程科目、

博物館学芸員課程科目、司書、司書教諭科目を抽出して免許・資格科目としてまとめる。総合満足度は全体平均とほぼ同様の、4.23 (-0.01) を示し、各項目でも全体平均とほぼ同等である。特徴的なのは、Q12 (教員の熱意) は全体平均を 0.06 ポイント上回り、免許、資格科目を担当する教員が、免許、資格を保持して社会で活躍する学生の養成に情熱を傾けた教育をしていることがわかる。

2) 評価からみた課題

「共通総合科目」「外国語科目」はいずれも、学生の総合満足度が徐々に増加し、特に、「共通総合科目」は全体平均を上回るポイントである。「外国語科目」についても、英語が苦手な学生が少なからず含まれていることを踏まえると、十分に評価できるポイントであると考えられる。大人数クラスの授業運営については、教材の工夫やマナビコースの利用など、教員の創意工夫による改善が推察される。1 つ課題を挙げるとすると、「共通総合科目」の予習・復習時間が少ないことである。この点は、共通総合科目では教員から出される日常の「課題」が少ないことが予想される。その場限りの「講演会」にならないように、学習課題を示して、授業時間以外の学習時間の確保も考えていく必要があるのではないかと考える。

2019 年度は、全学教育センターが教授会として発足して 2 年目となり、共通総合の「外国語」の科目運営については、下部組織である「外国語部門」によるマネジメントが明確になり、各授業運営が良好になったことに奏功している可能性がある。全学教育センター人事で採用した非常勤講師も徐々に増え、共通総合科目を中心に授業運営について考える教員が増えたことも改善に影響したことが推察される。また、「免許・資格科目」も全体の結果と同等の結果となり、学生が免許・資格を取得、活用して社会での就労につなげるための教育実践が確認できたと考える。引き続き、全学教育センターがこれらの科目マネジメントを継続して、教育の質保証に関与することが期待される。

(3) 専門科目の課題

【表5】は2019年度の「授業の総合的評価」に関わると考えられる項目について、学科ごとの評価平均値を示したものである。まず、「Q19. 授業の総合的満足度」の項目について、高い順に学科ごとに並べると、服飾造形学科(4.36)、健康栄養学科(4.33)、家政福祉学科(4.32)、日本文学文化学科(4.27)、国際学科(4.27)、こども発達学科(4.24)と、ここまでの全体平均(4.24)より上であり、続けて、心理学科(4.22)、看護学科(4.12)の順となっている。

授業の「Q19. 総合的満足度」に関連する設問「Q18. 受講を後輩に勧めたい」では最も高いのが健康栄養学科(4.25)で、続いて服飾造形学科(4.24)、国際学科(4.11)と続く。平均値より低いのは、心理学科(4.06)、日本文学文化学科(4.04)、看護学科(4.03)である。また「Q17. さらに勉強したくなった」では、最も高いのが家政福祉学科(4.3)服飾造形学科(4.19)、健康栄養学科(4.14)、国際学科(4.10)、子ども発達学科(4.03)で、平均を下回っているのは看護学科(4.02)、心理学科(4.02)、日本文学文化学科(4.01)になっている。

【表5】学科毎の評価平均値(2019年度)

学科 (降順)	Q19. 授業の 総合的満足 度	学科 (降順)	Q18. 受講を 後輩に勧め たい	学科 (降順)	Q17. さらに 勉強したく なった
服飾造形学科	4.36	健康栄養学科	4.25	家政福祉学科	4.3
健康栄養学科	4.33	服飾造形学科	4.24	服飾造形学科	4.19
家政福祉学科	4.32	国際学科	4.11	健康栄養学科	4.14
日本文学文化学科	4.27	家政福祉学科	4.09	国際学科	4.1
国際学科	4.27	こども発達学科	4.09	こども発達学科	4.03
こども発達学科	4.24	心理学科	4.06	看護学科	4.02
心理学科	4.22	日本文学文化学科	4.04	心理学科	4.02
看護学科	4.12	看護学科	4.03	日本文学文化学科	4.01
全体平均	4.24	全体平均	4.09	全体平均	4.03

2019年度の結果を[表6]で示した前年度(2018年度)の結果と比べてみると、評価が(3.0)台であったものが全て(4.0)台に上昇したことである。Q19.授業の総合的満足度は平均値で0.14ポイント上昇、Q18.受講を後輩に勧めたいでは0.09ポイント、Q17.さらに勉強したくなかったでは0.13ポイントの上昇である。そして、前年度の上位2学科であった服飾造形学科、健康栄養学科は2019年度においても上位であり、新設の看護学科は2年次までの評価で専門科目が少なく総合評価を反映するには不足があると思われる。

【表6】学科毎の評価平均値(前回2018年度)

学科 (降順)	Q19. 授業 の総合的 満足度	学科 (降順)	Q18. 受講を 後輩に勧め たい	学科 (降順)	Q17. さらに 勉強したく なかった
服飾造形学科	4.20	健康栄養学科	4.15	服飾造形学科	4.06
健康栄養学科	4.2	服飾造形学科	4.13	健康栄養学科	4.01
日本文学文化学科	4.15	国際学科	4.07	国際学科	4.01
国際学科	4.14	日本文学文化学科	4.04	日本文学文化学科	3.96
家政福祉学科	4.1	家政福祉学科	3.99	家政福祉学科	3.93
心理学科	3.94	看護学科	3.89	こども発達学科	3.84
看護学科	3.93	こども発達学科	3.88	看護学科	3.82
こども発達学科	3.89	心理学科	3.83	心理学科	3.77
全体平均	4.10	全体平均	4.00	全体平均	3.90

4. 資料

<2019 年度授業評価アンケート設問>

Q1	授業はシラバス（講義概要）にそって行われていた
Q2	授業の内容は知的刺激に富んだものだった
Q3	この授業で新しい知識・技術等を学ぶことができた
Q4	教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた
Q5	テキストやプリント、画像、実物等が使われ、理解によく役立った
Q6	板書の文字や図は見やすかった
Q7	教員の話し方、声の大きさは適当で聞き取りやすかった
Q8	教員の説明は分かりやすかった
Q9	教員は学生の質問、相談に適切に対応した
Q10	授業の開始と終了の時間は適切だった
Q11	教員は私語に対し適切な対応をしていた
Q12	この授業から教員の熱意が感じられた
Q13	自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした
Q14	この授業はよく出席した
Q15	この授業の予習復習等に当てた時間（毎週） ⑤3h 以上 ④2～3h 未満 ③1～2h 未満 ②1h 未満 ①特にしていない ①該当しない・答えたくない
Q16	この授業のレポートや試験に積極的に取り組んだ
Q17	この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった
Q18	この授業の受講を後輩にも勧めたいと思う
Q19	あなたのこの授業に対する総合的な満足度を示してください ⑤大変満足 ④やや満足 ③どちらでもない ②やや不満 ①不満 ①該当しない・答えたくない
Q20	この授業についての意見・感想・希望等あなたが思っていることをできるだけ具体的に何でも記入してください

選択肢：⑤強くそう思う ④そう思う ③どちらでもない ②やや不満 ①不満
①該当しない・答えたくない

令和元(2019)年度 授業評価アンケート報告書

令和 3(2021)年 1 月

編集 和洋女子大学 大学評議会

担当 刀根洋子 湊久美子

発行 和洋女子大学

〒272-8533 千葉県市川市国府台 2-3-1

TEL 047-371-1111